

目次

- ①革命前、1916年8月、社会主義への道の多様性と社会主義の多様性について
- ②ロシア革命のまえ、1916年8月、社会主義革命にとって欠くことのできない民主主義
- ③革命半年後、ソヴェト権力の当面の任務
- ④『ソヴェト権力の当面の任務』（1918年3～4月に執筆、第27巻P242～243）からの抜粋
- ⑤1919年1月、労働組合第二回全ロシア大会でのレーニンの報告
- ⑥1919年6月、住民の慣習となっている古風な遺制については…
- ⑦1919年7月、新しい芽生え、悪循環を打ちきり、社会主義を勝利させる高い労働生産性
- ⑧1920年10月、青年同盟へ
- ⑨1921年1月、コンミュンについて
- ⑩1921年5月、官僚主義との闘争には、
- ⑪1922年1月、新経済政策の諸条件のもとでの労働組合のへ
- ⑫『国家と革命』から「過渡期」と「未来社会」を見るとマルクス・エンゲルス・レーニンと不破さんとの違いがハッキリする

*抜粋した文章の中で青字で表記されている文字は原典で異字体で表記されている文字です。

①革命前、1916年8月、社会主義への道の多様性と社会主義の多様性について

「発展した資本主義のもとでは一様に避けられない、こんにちの帝国主義のもとでのトラストや銀行でさえ、国が異なれば、具体的な形としては同一ではない。まして、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツのような先進の帝国主義国の政治形態は、だいたい同質であるにもかかわらず、なおさら同一ではない。このような多様性は、人類がこんにちの帝国主義からあすの社会主義革命へすすんでいく道の上にも現れるであろう。すべての国民は社会主義へ行きつくであろう。それは避けられない。しかし、すべての国民がまったく同一のやり方で行きつくとはかぎらない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの独裁のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをもたらすであろう。「史的唯物論の名のもとに」、この点で未来を灰色がかかった一色でえがきだすほど、理論的に貧弱で、実践的にこっけいなことはない。これはスズダリ〔の聖像画家〕式のぬたくり絵であって、それ以上のものではない。社会主義的プロレタリアートが最初の勝利をおさめるまでに、解放され分離するのがこんにちの被抑圧民族の五〇〇分の一にすぎず、社会主義的プロレタリアートがこの地球上で最後の勝利をおさめるまでに（すなわちすでに開始された社会主義革命が幾多の転変をとげるあいだに）分離するのが、同じく被抑圧民族の五〇〇分の一にすぎず、それもほんのしばらくの間であることを現実がしめすようなばあいさえ——そういうばあいさえ、抑圧民族の社会主義者ですべての被抑圧民族の分離の自由を承認せず、またそれを宣伝しないものを、われわれがもういまから自分たちの社会民主党に寄せつけ

ないように労働者に勧告するのは、理論的にも実践的＝政治的にも、正しいことであろう。なぜなら、民主主義の形態の多様性と社会主義への移行の形態の多様性とにささやかな寄与をするためには、被抑圧民族のどれだけのものが分離する必要があるかを、われわれは実際のところ知らないし、また知ることができない。しかし、われわれは、こんにち分離の自由を否定することが、はてしない理論的虚偽であり、実際には抑圧民族の排外主義者にたいする奉仕であるということを知っているし、毎日のように見たり、感じたりしているからである。(第 23 巻 P70~72『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』1916年8月～10月執筆)

②ロシア革命のまえ、1916年8月、社会主義革命にとって欠くことのできない民主主義

レーニンは「社会主義は、つぎの二つの意味で、民主主義がなければ不可能である。(一)プロレタリアートは、民主主義のための闘争によって社会主義革命の準備をしていなければ、この革命を遂行することができない。(二)勝利をしめた社会主義は、民主主義が完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へ導くことができない」(第 23 巻 P76~77『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』1916年8月～10月に執筆)と述べ、『国家と革命』でも「われわれがみな知っているように、この時期の「国家」の政治形態は、もっとも完全な民主主義である」と述べています。

同時期に書いた『ペ・キエフスキー(ユ・ピャタゴフ)への回答』(1916年8月～9月に執筆 全集 第 23 巻 P16~20)でも、「資本主義と帝国主義を打倒することは、どのような、どんなに「理想的な」民主主義的改造をもってしても不可能であって、経済的変革によるのみ可能である」こと、「しかし、民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない」こと、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織することなしには」、「全勤労大衆の国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには」、資本主義に打ちかつことはできないことを「十月革命で政権をとる」まえから述べています。レーニンは「過渡期」の課題、社会主義建設の課題を正確に認識していました。

③革命半年後、ソヴェト権力の当面の任務

第 42 巻『論文『ソヴェト権力の当面の任務』の最初の案文』(1918年3月23日から28日のあいだに口述)からの抜粋。

「いまやソヴェト権力のまえに第一級の任務として提起されるにいたった、国家を統治するという任務は」、「卓越した意義をもつのが政治でなくて経済であるという、そうした統治が、いまや——おそらく文明諸国民の近代史上はじめて——問題となっている」。

「この任務は、つぎの二つの主要な項目に分かれると言える。(1)生産物の生産と分配とをもっとも広範で、あらゆる地域をつうじる普遍的なかたちで記帳し統制すること、(2)労働生産性を向上させることである。」

「われわれは、勤労住民の労働力になんの害もあたえずに、テーラー・システムと労働生産性の科学的なアメリカ式向上を、労働時間の短縮や、生産と労働の組織の新しい方法の利用と結びつけることによって、全ロシアにこの方式を導入しなければならない」。

それによって、「全勤労住民にとって必須の労働日を、さらに、かつ大幅に短縮するもっとも確実な手段となるであろうし、また、おおよそつぎのように表現できる課題——すなわち、すべての成年市民にとって、毎日六時間の肉体労働と四時間の国家統治のための労働という課題を、かなり短い期間のうちに実現するもっとも確実な手段となるであろう」。

「このような制度への移行には、きわめて多くの新しい熟練や新しい組織的機関が必要であろう。この移行が、われわれに少なからぬ困難をもたらし、このような課題の提起が、勤労者自身のあいだの若干の層の疑惑すら引きおこすこと、もしかすると反抗をも呼びおこすことは、疑いをいれない。しかし、確信してさしつかえないが、労働者階級の先進分子はこのような移行の必然性を理解するである」。

「生産物の生産と分配にたいする記帳と統制という課題は、早くも实际的な指導者や組織者を前面に押し出す。」「新しい組織者的才能のある人々を国家統治の仕事へ幅広く参加させる必要性をはっきりと理解」し、「是が非でも、指導者にもソヴェト選挙人大衆つまり勤労被搾取大衆にも、ここに示した転換の必要性をそれぞれ理解させなければならない」。「大衆を代表するソヴェト諸機関の成員の統制のもとで大衆によって実施されている諸原則を基礎として」、労働者と農民の中から、「短期間のうちに生産の实际的組織者の新しい層を生みだし、彼らに地歩をかためさせ、彼らにふさわしい指導的地位を占めるようにさせる」なければならない。

④『ソヴェト権力の当面の任務』（1918年3～4月に執筆）からの抜粋。

「あらゆる社会主義革命における、したがってまた、1917年10月25日にわれわれがはじめた、ロシアの社会主義革命における、プロレタリアートとそれに指導される貧農との主要な任務は、幾千万の人人の生存に必要な物資の計画的な生産と分配とを包括する新しい組織的諸関係の、きわめてこみ入ったこまかい網をあみ上げるといふ、積極的なあるいは創造的な仕事である。このような革命は、大多数の住民、まず第一に大多数の勤労者が、自主的に歴史創造活動をおこなってはじめて、首尾よく実現できるのである。プロレタリアートと貧農が、自覚、理想性、献身、不屈さを、十分に具現することができてはじめて、社会主義革命の勝利は保障されるであろう。われわれは、勤労被抑圧大衆が新しい社会の自主的な建設にもっとも活動的に参加するのを可能にする、新しいソヴェト型の国家をつくりだしたが、それだけではまだ困難な任務のわずかな部分だけを解決したにすぎない。主要な困難は経済の分野にある。すなわち、物資の生産と分配とのもっとも厳格な、また普遍的な記帳と統制とを実施し、労働生産性をたかめ、**実際に生産を社会化**することである。」（第27巻 P242～243）

このようにレーニンは、人民権力樹立後の社会主義革命における主要な任務として、物資の生産と分配とのもっとも厳格な、また普遍的な記帳と統制とを実施し、労働生産性をたかめ、実際に生産を社会化することであると、そのために「大衆を代表するソヴェト諸機関の成員の統制のもとで大衆によって実施されている諸原則を基礎として」、労働者と農民の中から、「短期間のうちに生産の实际的組織者の新しい層を生みだし、彼らに地歩をかためさせ、彼らにふさわしい指導的地位を占めるようにさせる」ことを提案した。

大多数の住民、まず第一に大多数の勤労者が、自主的に歴史創造活動をおこなってはじめて、プロレタリアートと貧農が、自覚、理想性、献身、不屈さを、十分に具現すること

ができてはじめて、社会主義革命の勝利は保障されることを強く訴えた。

この時点での「過渡期」の課題と解決策を見事に抽出した。

ただ、残念ながら、これらの「過渡期」の課題と解決策を本格的に実践するまえに、ユデニッチやデニキンやコルチャックらと長期の死闘を繰り広げなければならなかった。

⑤1919年1月、労働組合第二回全ロシア大会でのレーニンの報告

「……ここでは労働組合は、なににもまして、近代共産主義の創設者のもっとも深遠な、注目すべき格言の一つ「歴史的行動が根本的であればあるほど、その行動をおこなう大衆の範囲は拡大する」〔補巻5、277 ページ〕を、熟考しなければならない。……そして、いま人類史上はじめて、社会主義の完全な勝利をもたらさうとする変革がはじまっている。ただそれには、新しい膨大な大衆が自主的に統治の仕事にとりかかることが条件となる。社会主義的変革が意味しているものは、国家形態の変更ではないし、君主制を共和制に代えることでもないし、人々の新しい投票でもない。……われわれが開始した変革、われわれがすでに二年間も遂行しており、最後まで遂行しようとかたく決意している変革（拍手）——この変革は、われわれが新しい階級への権力の移行をなしとげるばあいだけに、ブルジョアジー、資本主義的奴隷所有者、ブルジョア・インテリゲンツィア、すべての有産者の、すべての所有者の代表者にかわって、新しい階級が、あらゆる行政分野で、下から上まで、国家建設の全事業に、新しい生活の指導という全事業に参加するばあいだけに、可能であり、実現できるのである。

これが、現在われわれの当面している任務である。この新しい階級が本や集会や演説によってではなく、自分の統治の実践によって教育されるときにはじめて、この階級がこの統治にもっとも広範な勤労大衆を参加させるときにはじめて、国家を統治し国家秩序を創設する仕事にすべての勤労者がたやすく順応することを可能にするような諸形態をこの新しい階級がつくりだすときにはじめて、社会主義的変革は強固なものとなりうるのである。そういう条件がそなわるときにはじめて、社会主義的変革は強固なものとならざるをえないのである。そういう条件がそなわるときには、社会主義的変革は、資本主義とそのすべての遺物とをわらくずとして、塵あくたとして、投げすてる勢力となるであろう。

これが、一般的にいて、階級的見地からみて、勝利の社会主義的変革の条件として、われわれが当面している任務である。この任務は資本主義社会の枠内にあつてさえ資本主義社会の廃止のためのもっとも広範な大衆闘争をめざしてきた諸組織の任務と、きわめて緊密に、また直接に接合している。」ことを述べ、労働組合の新たな役割として、「すべての国家機関の内部で直接に活動することにより、それらの国家機関の活動等々にたいする大衆的な監督を組織することにより、生産および分配全体の記帳、統制、調整のための新しい諸機関を創設し、利害関係をもつ広範な勤労大衆自身の組織的な自主活動に依拠する諸機関を創設することによって、ソヴェト権力の活動に精力的に参加することができるし、また参加しなければならないのである。」と述べている。

(第28巻『労働組合第二回全ロシア大会での報告』P452～453 1919年1月20日)

⑥1919年6月、住民の慣習となっている古風な遺制については…

「 南部戦線革命軍事会議への電報 南部戦線革命軍事会議
ドン地方コテリニコフ地区革命委員会は、命令第 27 号によって、「スタニーツア」の名称を廃止し、「ヴオーロスチ」とよぶことを決定し、それに従ってコテリニコフ地区を郷に分けている。

同地方の諸地区では、地方当局はすじ付ズボンをはくのを禁止し、「カザック」という言葉をやめさせている。

第九軍では、同志ロガチェフが勤労カザックから無差別に馬具と馬車を徴発している。

同地方の多くの土地では、農民の日用品の定期市が禁止されている。スタニーツアでは、オーストリア人の捕虜をコミサールに任命している。

一般政治上まったく無意味で、しかも住民を刺激するこの種のこまかな生活慣習の破壊には、とくに慎重でなければならないことに注意をうながす。基本問題では方針を堅持しながらも、住民の慣習となっている古風な遺制については、これを受け入れる態度をとり、大目に見てもらいたい。

電信で回答してもらいたい。 人民委員会議長 レーニン 」

(第 44 卷 P292 ~ 293 『南部戦線革命軍事会議への電報』 1919 年 6 月 3 日に執筆)

⑦1919年7月、新しい芽生え、悪循環をたちきる力、社会主義を勝利させる高い労働生産性

「問題の本質をとりあげてみるならば、新しい生産様式が、ひきつづく幾多の失敗と誤りと逆転を伴わないで、一気に根づくことが、はたして歴史上にあったであろうか？

…… われわれは空想家ではない。われわれはブルジョア的「論証」の真の価値を知っており、また変革後のある期間は、慣習のなかのこる古いものの痕跡が新しいものの芽ばえよりも優勢であるのは避けられないことを知っている。新しいものが生まれたばかりのときには、いつでも古いものが、しばらくのあいだ、新しいものよりも強い。自然でも、また社会生活でも、いつもそうである。新しい芽ばえの弱さにたいする嘲笑、安っぽいインテリゲンツィア的懷疑主義、等々は——すべてこれらのものは、実は、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの階級闘争のやり方であり、社会主義にたいする資本主義の防衛である。われわれは、新しい芽ばえを入念に研究し、もっとも注意ぶかくそれを取りあつかい、あらゆる方法でその成長をたすけ、そしてこの弱い芽ばえを「いたわりそだて」なければならない。そのうちのいくつかが枯れてしまうことは避けられない。まさに「共産主義土曜労働」がとくに重要な役割を演じるであろうと、保障することはできない。問題はそこにあるのではない。新しいもののありとあらゆる芽ばえを支持することが問題なのであり、そのなかから生活は、もっとも生活能力のあるものをえらびだすのである。もし日本の一学者が、人々が梅毒を征服するのをたすけるために、一定の要求をみたす 606 号目の薬品をつくりだすまでに、605 種の薬品を試験するだけの忍耐をしたとすれば、資本主義を征服するという、より困難な任務を解決しようとのぞむものは、もっとも適当な闘争のやり方、方法、手段をつくりだすために、何百回何千回となく、新しい闘争のやり方、方法、手段をためすだけの、根気づよさをもっていなければならない。

……労働生産性は、結局のところ新しい社会制度が勝利するために、もっとも重要な、

もっとも主要なものである。資本主義は、農奴制のもとでは見られなかったような労働生産性をつくりだした。資本主義は、社会主義が、新しい、はるかに高度な労働生産性をつくりだすことによって、最終的に克服されることができし、また最終的に克服されるであろう。」（第29巻『偉大な創意』P429～431 1919年7月）

⑧1920年10月、青年同盟へ

レーニンは『青年同盟の任務』（第31巻P292～295、1920年10月2日。2-17「共産主義者とはなにか」参照。）で「新しい共産主義的教育」について、「プロレタリアートと同盟し、利己主義者や小所有者に反対し、私は自分の利潤をえるために努力しているので、ほかのことなどすこしも知ったことではない、とかたる心理と習慣に反対しての教育」と述べ、「資本主義的生産様式のかせ」との闘いの必要性を指摘している。

そして、「これを実現するには、ブルジョアジーとの規律ある必死の闘争の環境のもとで、自覚した人間に変わりはじめた青年の世代が必要である」こと、「われわれは共産主義者と自称している。共産主義者とはなにか？ コムニストというのはラテン語である。コムニスとは共同という意味である。共産主義社会というのは、すべてのものが——土地も工場も——共同であり、労働も共同であるという意味である。これが共産主義の意味である」こつと、そして、共産主義を経験を通じて、自分自身の生活体験を通じて学ぶことで人々が共産主義の自覚した味方となることを述べ、「青年同盟員であるということは、自分の活動、自分の力を共同の事業にささげるように仕事をすすめることである。これこそ、共産主義的教育である。このように活動を通じてこそはじめて、青年男女は真の共産主義者になるのである。彼らがこの活動で実地の成功をおさめることができるばあいにはじめて、彼らは共産主義者となるのである」と述べている。

そして、「同盟は、どんな労働者でも、同盟員の説く学説はたぶん理解できないにせよ、また、おそらくすぐにはその学説を信じないにせよ、同盟員の現実の活動に照らし、彼らの行動に照らして、これは真に自分たちに正しい道をしめしてくれる人々だということを見てとるようなものでなければならない。

もし青年共産同盟があらゆる分野でこのようにその活動を組織することができないなら、それは、同盟が古いブルジョア的な道にまよいこみつたあることを意味する。われわれの教育は、共産主義の学説から出てくる任務を勤労者が解決するのをたすけるため、搾取者に反対する勤労者の闘争と結びつけられなければならない。」と述べている。

⑨1921年1月、コンミュンについて

ヴラヂカフカーズ鉄道プロレタリア駅の労働者、職工、職員、共産党細胞への挨拶の抜粋。

「文化啓蒙の仕事と学校の仕事にいっそう注意をはらうよう、おすすめします。……

とくに私の興味をひいているのは、諸君のはじめた共産主義的農業です。今日共和国の当面している主要な課題の一つは、農業の発展と高揚です。諸君が今年じゅうに、2200デシャチーナの耕作と25デシャチーナの野菜栽培に成功するだろうという知らせは、私をよろこばせました。諸君は、諸君の農業が農業科学の教えるように正しく組織されるよう気をくばるべきであり、そのためには、知識のある農業技師を諸君の事業へ引きいれたらいいでしょう。

とくにお願いしますが、コンミュンでの活動は、周囲の農民を援助し、かつ彼らと最良の関係をたもつように組織してください。これなしには、また実務的、实际的、経済的な成功なしには、私はコンミュンをあまり信用できないし、コンミュンというものがすこしばかり心配にさえなります。」（第45巻P39-40『プロレタリア駅の労働者、職工、職員、共産党細胞へ』1921年1月20日）

1927年1月21日、新聞『モーロト』（ロストフーナードヌー）1641号にはじめて発表

⑩1921年5月、官僚主義との闘争には、

「あなたはこう書いている。

「大衆の自主活動は、官僚主義的な中央管理機関と呼ばれる腫瘍を根絶するときにはじめて可能である」と。

私は現場にいたことはないけれども、それでもこの官僚主義とそれがきわめて有害なことを知っている。あなたの誤りは、これを「腫瘍」として、一気になくし、「根絶する」ことができると考えている点にある。

これはまちがいだ。ツアーリを追いはらい、地主を追いはらい、資本家を追いはらうことはできる。われわれはそれをやってのけた。しかし農民国で官僚主義を「追いはらう」ことはできない。「根絶する」ことはできない。ゆっくりしたねばり強い努力によってそれをすくなくすることができるだけだ。

「官僚主義的腫瘍」を「取りのぞく」こと——これはあなたが他の個所で述べていることだが——これは問題提起そのものにおいて正しくない。これは問題を理解しないものだ。この種の腫瘍を「取りのぞく」ことはできない。それは治療することができるだけだ。外科手術はこのばあいばかりしているし、不可能だ。ゆっくり治療することだけだ。その他のことはすべていんちきか、おめでたい願望だ。

あなたはまったくおめでたい。あけすけに言ってすまないが。だがあなた自身、自分は若いと書いているのだ。

あなたが二〜三回官僚主義との闘争をためしてみたが敗北を喫したということを理由にして、治癒を断念するのはおめでたいことだ。第一に、私はあなたのこの不首尾におわった試みにたいしては、第一に、二〜三回ではなく二〇〜三〇回もためしてみ、くりかえし、はじめからやりなおすことが必要だ、とこたえる。

第二に、あなたの闘争方法が正しく、巧妙であったことが、どこで証明されるのだろうか？ 官僚主義者は機敏な奴で、彼らのうちの数多くの汚らしい奴らは大の狡猾漢である。彼らを素手でとらえることはできない。あなたは正しくたたかっただろうか？ 兵術のあらゆる原則にのっとり、「敵」を包囲した^{こうかつかん}だろうか？ 私は知らない。

エンゲルスを引合いに出しているが、これは理由がない。だれか「知識人」が引証するようにあなたにほのめかしたのではないだろうか？ よく言っても、無用の引証である。教条主義の気味がある。絶望しているように見られる。だが絶望することは、われわれにとっては笑うべきことであるか、さもなければ恥ずべきことだ。

農民的でしかもひどく疲弊した国での官僚主義との闘争には、長い時間が必要だ。そしてはじめの不成功にくじけることなく、根気づよくこの闘争をおこなうことが必要である。

「中央管理機関」を「取りのぞく」？ つまらないことだ。あなたはそのかわりになに

を設置するのか？ それはご存じない。取りのぞくのではなく、清め、治療するのだ。十ぺんも百ぺんも治療し、清めるのだ。そしてくじけないことだ。

報告をされるなら（このことにはけっして反対しはしない）、どうかあなたあての私の手紙も読みあげていただきたい。

お元気で。「気をおとさ」ないようにお願いします。レーニン」
(第 35 卷『エム・ソコロフへ』 P540～541 1921 年 5 月 16 日に執筆)

⑪1922年1月、新経済政策の諸条件のもとでの労働組合のへ

新経済政策の諸条件のもとでのソヴェト権力の社会改造の取り組みは、誤解を恐れず、大まかにいえば、資本の民主的規制のはじまり、本当の民主主義社会のはじまり、社会主義への出発点、という意味で、日本に民主連合政権ができ、私たちが経済改革・社会改造に取り組み始めるときの状況と多くの共通する課題をもっている。そのことも頭の片隅に入れて、「新経済政策」のもとで課題をレーニンがどう捉えていたか、見てみよう。

ロシア共産党中央委員会総会は 1921 年 12 月 28 日、新経済政策に関連する労働組合の役割と任務の問題を検討した。総会の決定に基づき、レーニンは『新経済政策のもとでの労働組合の役割と任務についてのテーゼ草案』（第 42 卷 P520-532）を 1921 年 12 月 30 日から 1922 年 1 月 4 日のあいだに執筆した。その中から今回のテーマの関わる記述を抜粋する。

まず、「プロレタリア国家がその本質を変えないで、商業の自由と資本主義の発展とを許すことができるのは、ただある程度までであり、国家が私的商業と私経営的資本主義を規制する（監督し、統制し、形態や方式を決定する、等々）という条件のもとでだけである。このような規制がうまくゆくかどうかは、国家権力にかかっているばかりでなく、それ以上にプロレタリアートと勤労大衆一般の成熟の度合いに、ついでは文化の水準その他にもかかっている。だがこのような規制が完全にうまくゆけばあいでも、労働と資本の階級的利害の対立は無条件にのこっている」ということ。

つぎに、「労働生産性をたかめ、各国営企業の無欠損と収益性を確保するもっとも緊切な必要があるために、また避けることのできない官庁間の利害や縄張り根性の行きすぎのために、労働者大衆と国営企業の企業長、管理者あるいはその所管官庁とのあいだに、不可避的に、一定の利害の対立を生みだす」ということ。

「階級が存在するかぎり、階級闘争は避けられない。資本主義から社会主義への過渡期に階級が存在するのは避けられない」。階級闘争が避けられない以上「ストライキ闘争を放棄することができず、ストライキを義務的な国家調停に代える法律を原則的にみとめることができない」こと。

しかし、「われわれの国家のような過渡的な型のプロレタリア国家のもとでは、ストライキ闘争の最終目標となりうるのは、この国家を官僚主義的にゆがめることとたたかい、この国家の誤りや弱点とたたかい、この国家の統制をふりきってのがれようとする資本家の階級的欲望とたたかう、等々することによって、プロレタリア国家とプロレタリア階級の国家権力を強化することだけである」。だから、「プロレタリア国家権力の存在している国家でストライキ闘争がおこなわれるのは、一つは、プロレタリア国家が官僚主義的にゆがめられており、国家機関に資本主義的な旧習のさまざまな遺物があるということ、い

ま一つは、勤労大衆が**政治的に未熟**で、**文化的におくれている**ということによってのみ、説明し正当化することができる」ということ。

プロレタリアートは、資本主義から社会主義への移行をなしとげつつある国家の階級的基礎であり、今こそ、国全体の国民経済を**管理**することを労働者と全勤労者が**実際に学ぶ**という、**長年月をみこまれる**ねばり強い、**実務的な活動**に、意識的に、断固として移ってゆかなければならないこと。

「党员数の少ない共産党が、労働者階級の前衛として、社会主義への移行をおこないつつある（まだいまのところすすんだ国々から直接支持されないままに）膨大な国を指導するときの、もっとも大きな、恐ろしい危険の一つは、大衆からきりはなされる危険であり、前衛が「戦線をととのえる」ことなく、全労働軍との、すなわち、労働者・農民大衆の圧倒的多数との固い結びつきを維持せずに、先ばしりしすぎる危険である」こと。

労働組合は、一方では、「大衆に、大衆のそのときの水準に順応することができなければならないが、他方では、大衆の偏見と立ち遅れをけって大目にみてはならず、確固として、大衆をますます高い水準に引き上げなければならない、等々」ということ。

「共産党も、ソヴェト権力も、労働組合も、たとえ思想的には共産主義にまったく無縁であるとしても、自分の仕事についての知識と仕事への愛着をもって誠実に働いているあらゆる専門家を、瞳のように大事にするようにならないかぎり、社会主義建設で大きな成功をおさめることなど問題にならない」ということ。

この抜粋の中に「社会主義建設」の「過渡期」の課題が見事に抽出されている。

⑫『国家と革命』から「過渡期」と「未来社会」を見るとマルクス・エンゲルス・レーニンと不破さんとの違いがハッキリする

『国家と革命』でレーニンは「民主主義を**徹底的に**発展させること、このような発展の**諸形態**を探しだすこと、これらの形態を**実践によって**点検すること等々、すべてこうしたことは、社会革命のために闘争するという任務を構成するものの一つである」（国民文庫P113）と述べ、社会革命と民主主義との切っても切れない関係と民主主義の多彩な発展の必要性について述べるとともに、「エンゲルスは、習慣(人間は、暴力なしに、服従することなしに社会生活の根本的な諸条件をまもる習慣——青山)のこの要素を強調するために、新しい**世代**についてかたっている。新しい世代が、『新しい自由な社会状態のもとに成長してきた一世代が、ついに国家の』——民主的共和制をもふくめたあらゆる国家の——『がらくたをすっかりなげすててしまえるときがくるだろう』（P119）と、エンゲルスを引用して、「過渡期」に新しい習慣をもった新しい世代が生まれることを述べています。

そして、不破さんが、「レーニンが『国家と革命』で示した未来社会の定式というのは、結局、生産物の生産と分配の仕方がどう変わってゆくかがすべてなのです」と揶揄した『国家と革命』は「第5章 国家死滅の経済的基礎」で、マルクス・エンゲルスを引用しながら「未来社会」について必要・十分な説明をおこなっています。

つまり、「共産主義社会の第一段階」＝「過渡期」＝「社会主義社会」は「あらゆる点で旧社会の母斑のくっついている」共産主義社会であるが、「すべての人が社会的生産を自主的に管理することをまなび」「生産力の巨大な発展」を図ることによって、「国家の

完全な死滅の経済的基礎」が築かれ、「精神労働と肉体労働との対立」もなくなり、「自由の国」＝「共産主義社会の高い段階」に到達する、と。

そしてこのマルクス・エンゲルス・レーニンと不破さんとの「未来社会」論の決定的な違いは二つあります。その一つは、「国家死滅の経済的基礎」をしっかりと見てその発展を通じて「共産主義社会の高い段階」を展望するのか、それとも、「未来社会では発展の推進力が上部構造に移ってゆく」として「国家死滅の経済的基礎」を「あまりうらやましくない」と言って捨て去るのかの違いです。そして二つ目は、不破さんのように「指揮者はいるが支配者はいない」といういわゆる「社会主義社会」を「未来社会」として捉えるのか、マルクス・エンゲルス・レーニンのように「精神労働と肉体労働との対立」もなくなり、「諸個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり」、恒常的な「指揮者」などいない「自由な結合的労働」の社会を「未来社会」として捉えるのかの違いです。

科学的社会主義とはマルクス・エンゲルス・レーニンの思想であり、不破さんの付け焼き刃の考えではないことがよくわかります。

*詳しくはHP「☆「社会変革の主体的条件を探究する」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった」を参照して下さい。